

第15回山のトイレを考えるフォーラム開催にあたって

山のトイレを考える会・代表 岩村和彦

平成26年度を迎え、北海道の山を愛する皆さまにおかれましては、ますますご健勝にて、山を楽しまれていることとご推察申し上げます。

かつてはこの時季に山を楽しむのは一部の愛好家だけで、多くの一般登山者はひたすら雪が溶けるのを待ち続けるものでした。しかしここ10数年前頃からは、スノーシューという便利な道具が広く普及し、またバックカントリーという比較的新しい言葉に代表される、不整地の野山を山スキーやスノーボードで自由に滑り下りる楽しみを享受する愛好家の増加は著しいものがあります。さらには夏から秋にかけて登山道を使う登山の他に、沢登りという日本特有の登山形態を楽しむ愛好者も多くなっているのは、紛れもない事実でしょうか。夏の山岳用品店には沢シューズや、沢のガイド本の売り場がひとときわ目に付くものです。

登山の楽しみ方の多様性が広がっているということは、実は山のトイレ問題とも密接に関係しています。100人の登山者が一つの山に同じルート、同時季に登ることによるダメージは計り知れません。一極集中により登山道の浸食も進み、また殆どの登山者が同じ場所で休憩を取り、そして周囲で排泄をする。これ以上の説明は必要ないでしょう。夏の羅臼岳の羅臼平や、トムラウシ南沼キャンプ場、美瑛富士避難小屋周辺の脇道を歩けば、誰もが目を背けたくなるシーンを目にするものです。

登山の楽しみ方は本来百人百様であるべきですが、現実には残念ながらそうではありません。それを象徴しているのが「日本百名山」でしょう。草葉の陰で著者はその意図とは別の思いもよらぬ影響力に、どんな思いでいることか想像に難くありません。登山者それぞれの百名山を見つけるだけで、私たちが今抱えている山の環境問題のかなりの部分は解決するものです。

さて、話はかわりますが今年の北海道の山に関しての大きな出来事に、羊蹄山の新避難小屋の開設があります。そして当会が最も関心を寄せているのが、小屋に併設されるトイレの稼働状況です。TSS方式の土壌処理と聞いていますが、実際の運用がどのようになるのかを重大な関心を持って見守りたいものです。そして同小屋においては使用済みの紙の、登山者自身による持ち帰りを徹底してほしいと考えています。それは同小屋に限らず、北海道にある登山口を含む山岳トイレ全てで行うことにより、汲み取り量の激減などメリットは計り知れません。一日も早く北海道ルールとして定着することを願っています。

最後になりましたが、15回目を迎えるフォーラムにわざわざ足を運んで下さる皆さまにお礼を申し上げると同時に、今後も当会の活動に有形無形のご支援、ご協力をいただきたく、衷心よりお願い申し上げます。